

の信仰を保持するに任すの義にして、前後文勢の関係よりすれば回鶻に入りし僧侶睿息の語を録したるものと見るべきものなるべし。

XII 12—17 「於諸王中最長」の長を Schlegel 氏は「最も秀でたるもの」の意と見、war er der vorzüglichste unter aller Begs と解きたれど、「長」は年長の意に外ならざること明らかなり。

XII 34—44 「天可汗垂拱寶位、輔弼須得」を Schlegel 氏は須得にて讀切り、Himmilischer Khan! (obwohl Du) mit herabgelassenem Gewande und gefalteten auf Deinem kostbaren Throne sitzest, brauchst Du doch Mitregenten と譯したれど、此の句は須得にて切るべき句とは思はれず、其の下には賢と思はるゝ字劃見え、和林金石録も馭と寫したれば須得の下には賢才、賢人の意を有する文字ありて一句を成せるものと見ざる可らず。

XIII 12—20 を Schlegel 氏は爲降誕之際、禎祥可持と讀み、和林金石録も同様に寫したれど、余の拓本によれば可持は明らかに奇特の二字なり、従て氏の譯せる Als er zur Welt kam, gab es glückliche Vorzeichen, worauf man sich verlassen konnte. の據る可きに非るは勿論なり。

XIII 61 以下の堅昆に關する記事を氏が乾元中の事と見たるの非なるは、本篇註〔一四八〕に之を説けり。

XV 12—26 「天可汗親統大軍、討滅元兇、却復城邑」に就きて氏は漢史には德宗の此の征伐に關して何等記する所なしとしたれど、此の碑文に見ゆる天可汗が回鶻の可汗を指し、唐の天子を曰へるに非ることは、下にも述ぶるが如くなれば、かゝる疑を附すべき理由の存する無し。

XVI 24—31 「吐蕃□□奔入于術」を氏は術に入ると讀み、術は兵術・陣術の意と解釋したれど、于術は一箇の地名